

# レナ川の白鳥調査に参加して

山 内 昇

日本白鳥の会会員として、長年の夢であったシベリアの繁殖地を調査する機会を与えて頂いた。しかも今までのように各国の多数の人達が調査・観察をした地域とは違い、シベリアの東北部を流れるレナ川の間地域で、サハ共和国ヤクーツク市より下流の北極圏に近い白鳥の未知の地帯であるとの松井会長からの話で、小踊りしたいほど嬉しく早速、書店で地図を調べたが、当地ではシベリアの奥地は全く知るすべは無かった。それは、各会員たちの今までの調査地とは違い日本人はもとより、自国の人達も特に白鳥については、何も知られていない処だと聞く。今どき世界でその様な処があるのだろうか一寸疑念さえもあった。その内に会長が病に倒れ入院するとの知らせに参加者たちは、迷走の域に入った様な思いではなかったか。

様々な紆余曲折があったが、7月13日8名全員が新潟空港に集結し顔を見た折に一安心し、ウラジオストクへ出発した。

7月14日、サハ共和国のヤクーツクに到着。ホテルで2泊する。この間、スポークスマンの金井様、ロシア語通訳をして頂いた藤巻教授には、大変御苦勞をおかけする。

ロシア科学アカデミーの生物研究所に伺い、副所長のニコライ・イワノビッチ・ゲルモゲノフ氏、他の快い歓迎を受け現地研究者との打ち合わせを行う。

先ず事務所の壁に張ってあった大地図の案内では、現在地のヤクーツクを差しサンガルと云う土地にベースキャンプを置く。その位置から飛行機で最初の調査をする。後はボート、ヘリコプターで調査をする。との話であった。

この地図の中、湿地帯を見ただけであまりの大河に只あぜんとした。地図上で何処が陸地なのか、何処が川幅なのか見当もつかない地域であることだけ解った。

7月16日、ヤクーツク博物館などを視察する。様々な標本など展示品を視るが、保存が良くすばらしい物ばかりであった。民族資料を見ると日本人のルーツが、この国ではないかと思わせる様な展示品が多く見られた。そのためか入国時の人種と云う、私の心の隔たりさえ無くなった。只、各種標本を観たが、白鳥の標本は目にする事が出来なかった。

国際保護鳥である白鳥は、狩猟民族ゆえ関心が無いのかとさえ考えた。その日の午後、20屯余の船でベースキャンプになる。サンガルへ川下りとなる。

ヤクーツクの船付場より15時間余の船旅であったが、途中で少し食べ物と2隻のボートとボート用の燃料を確保し、又、2時間余の船旅で最終のキャンプ地となる。

この船旅で船上から見る太陽は、沈むこと無く正に白夜であった。太陽の沈まない地域のためか、夜も暑い。日中は30度以上にもなるため、永久凍土地帯とは思われ無いほど植物の生長は早い。各種

植物を見ると何と云う順応性のある生物なのかと驚きさえもした。

私の住む町は、北緯45度。この地サンガルは、北緯65度、東経125度と地図上にも示している。現地で見ると全ての生物は、この白夜を巧みに生きている。北海道では、山野に生える植物のトガスグリ（ユキノシタ科）は、7月中旬の開花なのにキャンプ地のサンガルでは、実は赤く熟し食べごろであった。北梅道のトガスグリとは、40日以上も早く熟することになる。

この暑い夏に山こ入っても生水を飲むことの出来ない地域である。私たち調査する人達には、山野でこのトガスグリ（カリンズ）の実によって大変喉を潤わしてもらった。

このサンガルと云う地名は、石炭の出る所と云う意味だそうで、空港もあり、私たちは昼過ぎ、すばらしい飛行機でレナ川を中心とした湿地帯の調査に向かう。上空から観るレナ川は、何時間飛んでも地形に変化の無い様な処で、大河の増水で砂州ができ、そこに水辺にヤナギ。一寸の丘に針葉樹（マツ類）発生する。流砂で出来た三日月形の地形が幾重にもなって、その中に湖、沼も又、同じような状態であった。

この最初の調査で確認した白鳥は、2カ所で5羽を見たと云う。飛行機は、高度 200mの低空で二枚翼のため、機内の場所によっては白鳥の確認は困難でもあった。

日本の沼や湖は、何処へ行ってもヨシ原が多いが、この大河では、ヨシ原はあまり無く水辺はトクサ、ガリヤが多く見られた。林間の下草は、何処へ行ってもコケモモ、ベニバナイチャクソウが見られた。また、飛行機より処によっては、ヤナギラン（アカバナ科）の大群落が、一際美しかった。

夜、昼の無い白夜の生活に少し体調もなれて来たが、日本時間の夕方6時を過ぎてから、5人乗りのボートで中州の調査に出かける。深夜まで砂丘や湖沼、迷路の様な何時間走っても出口の無い様な枝川、白夜であるから出来ることと暗の無い世界でも人も生物も太陽の恩恵を受けていると思って行動していると白夜の探索も楽しく、副所長や現地参加の調査員たちの熱意もありがたかった。中州は何処へ行ってもヘラジカ、クマ、オオカミの足跡に遭遇した。やはり動物の多いシベリア、只今歩いたオオカミの足跡だよと伝えられた時は、警戒心が先行してか、シャッターを切るのも忘れていた。

地元の人達は、私たちの警護もあるためか銃はたえず放さなかった。

7月21日、夕方には、雷雨となった。副所長たちのグループが陸上から白鳥を観察したとの報せで、明日はヘリコプターで最後の調査日となるため、吉報であった。この大河で森林地帯を徒歩で確認したことで、もしや1羽にでも発信機を付けられるのではと期待もした。ヘリコプターで上空から現地に向かう。この時には飛べないはずの白鳥が、ヘリの爆音で飛去る。白鳥の飛行力は十分あり、何処かへ飛去した。

なぜ、今のレナ川地域の白鳥は換羽しないのか謎である。ヘリコプターに燃料は十分ある。この大型ヘリコプターで、大河を中心に両岸の中州を木目細かく調査する。ヘリコプターの調査では、合計3羽より確認はされない。何れも飛去ったそうである。現地参加の調査員もヘリもよくぞ十分な調査をしてくれた。

この大地で総合計が8羽より確認はされなかったが、日本人の調査したことの無い地域で、飛行調査をした訳で、当初の目的の発信機を装着する作業は出来なくとも、永久こ消える事の無いレナ川・大デルタ地帯の調査を世界に向けて日本白鳥の会会員が発信を続けることであろう。

7月23日、ヤクーツク生物学研究所へ最終の打ち合わせと挨拶に伺う。その折に副所長の話では、

過去10年ほど前に一度と、その後もう一度、この度で3度より白鳥の調査はしていない。白鳥のみの調査は、この度が最初の様な話を聞いた。

レナ川地域の白鳥については、これからも調査したい話の様であった。

シベリア大陸の移動する大型動物については、食文化からしてもあらゆる調査をしているようだ。やはり狩猟民族なのだから仕方が無いことだ。食べるための保護であって、自然との共生とは一寸考えて見たくもなる。各種の生物保護区はあれど期間を決めて休猟をすると云うのが保護のようである。

日本列島の保護区、ラムサール条約の湿地指定などは、この大河を観る時に鉛筆の針ほども無い保護区に2万羽以上もの白鳥が来ると云っても本気にはしない。

写真を見て驚きの様であったが、「オーチンハラシヨ」の返事が来た。あまりの大河のため、自国で調査できない国もあれば、国土の利用上からも野生動物の安住の地も無い国もあることを考える良い機会でもあった。

最後になりましたが、この調査に参加させて頂き、大変ご心配を頂いた 松井会長様  
通訳兼スポークスマンをして頂いた 藤巻教授様  
スポークスマンで大変御苦労を頂いた 金井 裕様  
各氏に深甚なるお礼を申し上げ、参加者一同が無事に帰省した事を共に喜び申し上げます。